

「いきいき・ふれあいサロン」の効果に関する一考察 — サロンの担い手への調査研究の知見から* —

岩 永 耕**

Findings of Effect of Fureai-ikiiki Salons : Insights Obtained From the Review of Surveys for Salons Operators

Ko IWANAGA**

キーワード：ふれあい・いきいきサロン、担い手、効果

1. はじめに

(1)止まらない高齢化

総務省 (2019) によれば日本の高齢化率は28.5% (2019年10月1日現在) に達し、今後もその勢いは衰えそうにない。2017年4月に国立社会保障・人口問題研究所が公表した「日本の将来推計人口」では65歳以上人口は増加傾向が続き、2042年に3,935万人でピークを迎え、その後は減少に転じると推計されている。総人口が減少する中で65歳以上の者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、2036年には33.3%で3人に1人が高齢者の時代となる。2042年以降は65歳以上人口が減少に転じるとの予想にも関わらず高齢化率は上昇を続け、2065年には38.4%に達して、国民の約2.6人に1人が65歳以上の者となる社会が到来すると推計されている。また総人口に占める75歳以上人口の割合も、2065年には25.5%となり、約3.9人に1人が75歳以上の者となるとされている。

(2)いきいきサロンの増加

そのような中で、全国社会福祉協議会 (2000) が「地域を拠点に住民である当事者とボランティアが協働で企画し、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動」と定義した「ふれあい・いきいきサロン (以下、「サロン」)」は着実に増えつつある。サロンは市町村の社会福祉協議会 (以下、「社協」) による関わりもあり、全国で67,903箇所 (2016年1月時点) に達しており、高齢者向けのものがこのうち82.1% (55,721箇所) を占めている (全国社会福祉協議会ら 2016)。

(3)サロンに関する先行研究

そのサロンについて、これまでもいくつかの調査研究がなされてきた。森 (2008) は、福岡市の2箇所のサロンと、同市内で開催されている2箇所の「小地域交流サロン」の利用者を対象に、サロン参加の「期間」や「頻度」、「理由」、サロン利用後の「人間関係の変化」、サロンへの「要望」などを調査している。また森 (2014) は京都市内の3箇所のサロンでも、利用者に対して「居住形態」やサロンの「利用頻度」、「利用の理由」に加えて、サロンの「満足感」やサロンで出会った住民との「サロン外でのつきあいやつながりの程度」を調査した。豊田 (2016) は、新潟市にある5箇所のサロン利用者のうち、75人を抽出して個別に面接調査を行い、サロン利用の「頻度」や利用者にとってのサロンの「意義」を調べた。その結果、サロンは「地域社会における人間関係を豊かにしていくための地域活動の一形態として有効」であると結論づけている。山村 (2013) もサロンの代表者と利用者の双方に調査を行い、「社協による支援の有無」や「ソーシャルキャピタル」に関する諸設問への「回答率」や、サロンの「運営困難度」、「運営形態」、「自主運営の継続性」等によって16のサロンを類型化し、類型ごとに「サロンへの支援の開始・終了」に関する「指標」を導きだした。またサロンの代表者を対象にした研究は、宝塚市にあるサロン120箇所を対象とした松井 (2014) の研究がある。この研究では、サロンの運営者に「実施主体」、「開催頻度」、「開催年数」、「1回あたりの開催時間」や「参加費」、「運営資金の入手先」、「プログラム内容」、サロンの「課題」を尋ねている。また、これらに加えて「利用者の特性」についても、利用者ではなくサロンの運営者に質問している。その結果、「宝塚市のサロンは週1回開催するところが多く、障害

* Received October 24, 2019

**長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 Faculty of Contemporary Social Studies Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

者や子育て中の住民など、幅広い年代の利用者が混在しており、それぞれのサロンで多岐に渡る課題を抱えている」と結論づけている。他にも山口県社協が行ったサロンの代表者や利用者に対する調査結果を用いて論じている高野（2007）の研究がある。この研究で高野は「サロンは高齢者の社会参加の受け皿であることに加えて、参加住民の『福祉教育の場』としても機能している」と述べている。他にも、東京都世田谷区にあるサロンを事例にして、サロンの「変容」と「課題」について調査は行わずに論じている黒岩（2004）の研究などもある。

(4)本論の目的

そこで本論では、サロンに関する既存研究のうち社協が県内全域もしくは市内全域のサロンに調査を行った既存の研究調査のうち、サロンの担い手に対して調査をした結果に着目して、サロンを利用している高齢者にはどのような効果があるのかを明らかにし、さらにその効果の背景にはどのような要因があるのか考察することを目的とする。

2. サロンの目的とねらい

サロンは自然発生的に生まれたものではなく、全国社会福祉協議会が啓発して始まった。全国社会福祉協議会（2000）によるサロンの定義は「地域を拠点に住民である当事者とボランティアが協働で企画し、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動」であり、これは現在も変更されていない。また、その効果として①必要とされる喜びが生きがいや社会参加意欲を高める、②サロンに出かけることで体を動かす、③適度な精神的刺激を受ける、④会食や血圧チェック、保健指導による健康に関する意識が向上する、⑤生活にメリハリができる、⑥人に会う機会が増え、閉じこもりを防ぐ、の6点が挙げられている。

3. これまでの調査での結果

(1)山口県での調査結果

1995年に山口県社会福祉協議会によって同県で実施された調査では、サロンの利用者だけではなく担い手にも質問がされた（山口県社会福祉協議会2006）。それらのうち、サロンによるサポート効果があると思うかについて質問したのは表1の項目であり、それぞれ5段階の尺度が用いられている。

表1 サロンの効果に関する質問

利用者が人と話す機会の増加効果があると思うか。
利用者の閉じこもり・孤立防止の効果があると思うか。
利用者が新しく友達を形成する効果があると思うか。
利用者の心配事や悩み発見の効果があると思うか。
利用者のいきがいへ貢献していると思うか。
利用者の安否確認効果があると思うか。

調査の結果、利用者が「人と話す機会の増加効果があると思う」と答えたのは70%であった。同様に「閉じこもり・孤立防止の効果」は67%で、「新しい友達の形成」は56%、「安否確認の効果」は58%が「そう思う」と回答した。また「心配事や困りごとの発見」の効果があると答えたのは33%のみで、生きがいになっていると思うと答えたのは55%であった。これらの結果を1つのグラフで表したのが図1である。

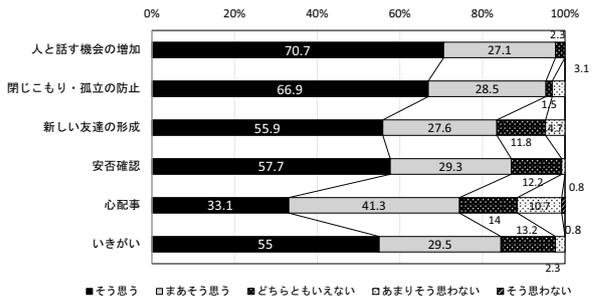


図1 担い手が考えたサロンの効果（山口県）

出典：山口県社会福祉協議会（2006）『人と人との豊かなつながりを育む「ふれあい・いきいきサロン」』のデータを筆者が加工した。

(2)鹿児島県での調査結果

2010年に鹿児島県社会福祉協議会が同県で行った調査では、サロンの運営者に対して「サロンによる効果があると思う項目」を、選択肢の中から複数回答で選ばせている（鹿児島県社会福祉協議会2011）。その結果、「閉じこもり・孤立防止」の効果を選んだのは447名もいた一方で「新しい友人や仲間づくり」を選んだのは156名のみであった。また「安否確認」を選んだのは406名おり、「いきがい」を選んだのは289名であった。これらの結果を図2に示した。

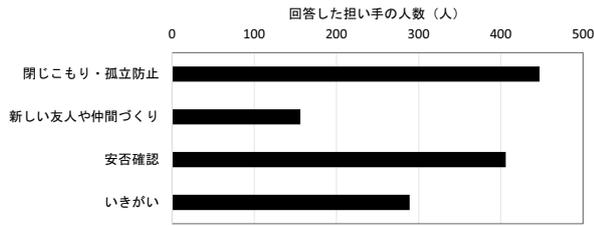


図2 担い手が考えたサロンの効果（鹿児島県）

出典：鹿児島県社会福祉協議会（2011）「ふれあい・いきいきサロン活動実態調査報告書及び活性化プログラム」のデータを筆者が加工した。

(3)群馬県高崎市での調査

2015年に群馬県の高崎市社会福祉協議会が同市でサロンの運営者に対して実施した調査でも、鹿児島県同様に「サロンによる効果がある」と思う選択肢を回答者に複数、選ばせている。その結果、「他者と話す機会が増える効果がある」を選んだのは271名で、「閉じこもり・孤立防止」の効果を選んだのは208名、安否確認は191名、「いきがい」を選んだのは146名で「心配ごとの発見」が115名であった。これらの結果を図3に示した。

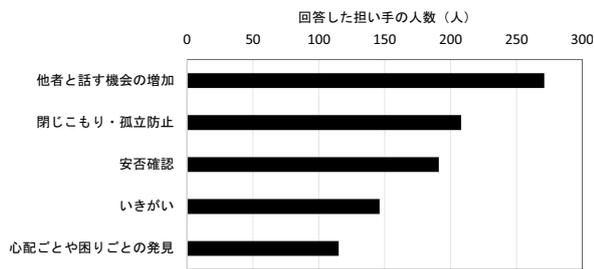


図3 担い手が考えたサロンの効果（群馬県高崎市）

出典：高崎市社会福祉協議会（2015）「ふれあい・いきいきサロンアンケート報告書」のデータを筆者が加工した。

(4)諫早市での調査結果

2016年に長崎県諫早市で実施された調査でも、サロンの担い手に対して「利用者にサロンによる効果があると思うか」を質問している。調査の結果、「利用者が人と話す機会増の効果があると思うか」に対して「そう思う」と答えたのは82%もあり、「閉じこもり・孤立防止の効果」は72%、「新たな友人との出会い」は54%で、「安否確認の効果があると思うか」は81%が「そう思う」と回答した。また、心配事や悩みの相談は40%で、「いきがい」は42%であった。これらの結果を示したのが図4である。

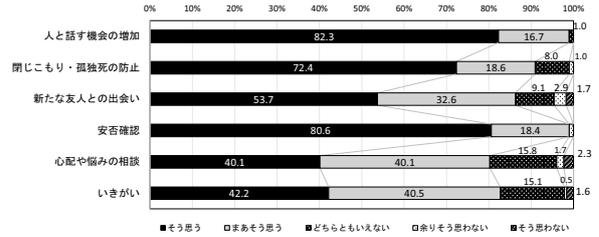


図4 担い手が考えたサロンの効果（諫早市）

出典：日本社会福祉学会第65回秋季大会配布資料 岩永耕「担い手が考えるふれあい・いきいきサロンの効果や課題—サロン担い手への質問紙調査による分析から—」のデータを筆者が加工した。

(5)山口県と諫早市での結果の比較

山口県と諫早市では、担い手に質問した項目がほぼ一致していることから、同じ項目の結果を比べてみることにする。「人と話す機会の増加」に関しては、「サロンによる効果があったと思う」と回答したのは山口県では71%で諫早市では82%であり、11ポイントも諫早市での割合の方が多かった。これらの結果を図5で示す。

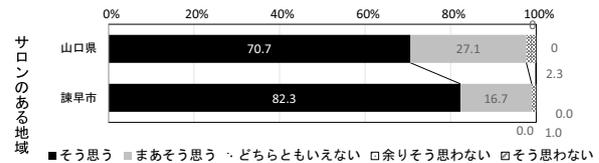


図5 担い手からみたサロンの効果（人と話す機会増の効果があると思うか）注1

「閉じこもり・孤独死の防止」に関して「効果があったと思う」と回答したのは、山口県では67%なのに対して諫早では72%で、約5ポイント諫早市の方が多かった。しかし「効果があった」と思うかに対して「まあそう思う」と回答した者まで含めると逆に山口県での割合の方が約4ポイント多かった。これらの結果を図6に示した。

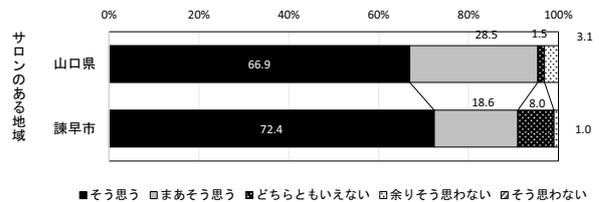


図6 担い手からみたサロンの効果（閉じこもり・孤独死の防止）注1

また「新たな友人との出会い」に関して「効果があったと思う」と回答したのは、山口県では56%で諫早では54%であり、その差は約2ポイント

トしかなく、「効果があった」に対して「まあそう思う」と回答した者まで含めても、山口県では合計84%なのに対して諫早市は合計86%と、大きな違いは見られなかった。これらの結果を図7に示す。

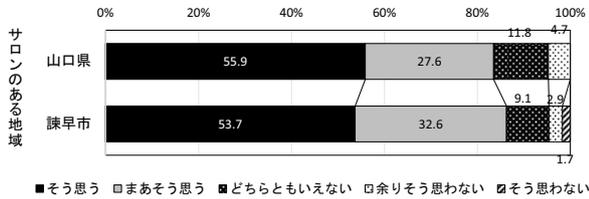


図7 担い手からみたサロンの効果 (新たな友人との出会い) 注1

次に「安否確認」に関して、サロンに「その効果があったと思う」と回答したのは、山口県では58%であったのに対して諫早では81%もいた。つまり23ポイントも諫早市の方が多く、「そう思う」と「まあそう思う」との合計をみても、山口県では87%であったのに対して諫早市では99%も占め、12ポイントも諫早市での割合の方が大きかった。これらの結果を図8に示す。

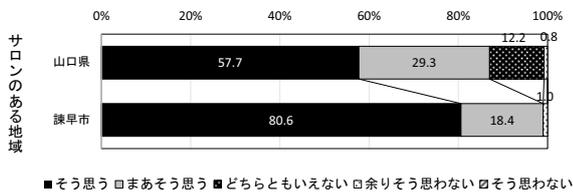


図8 担い手からみたサロンの効果 (安否確認) 注1

また「生きがいへの貢献」に関して、サロンに「その効果があったと思う」と回答したのは、山口県では55%であったのに対して諫早では42%であった。つまり13ポイントも山口県の方が大きな割合を示している。これらの結果を図9に示した。

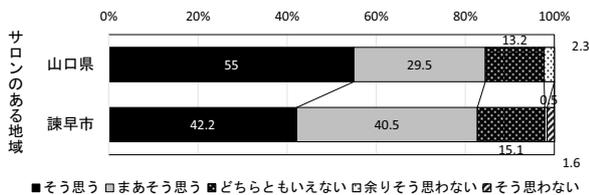


図9 担い手からみたサロンの効果 (生きがいへの貢献) 注1

「心配事・悩みごとの発見」で、サロンに「その効果があったと思う」と回答したのは、山口県で33%に対して諫早では40%であり、7ポイント

の差がみられた。また「効果があった」に対して「まあそう思う」と回答した者まで含めても、山口県では合計74%だったのに対して諫早市では合計80%と、やや諫早市の方が大きな割合であった。これらの結果を図10に示す。

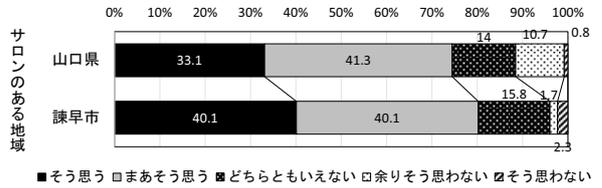


図10 担い手からみたサロンの効果 (心配事・悩みごとの発見) 注1

(6)4 地域間でのサロンの効果の比較

高崎市と鹿児島県でもサロンの担い手に対して、利用者への「サロンの効果」について調査がなされた。ただし、この2地域での調査は「サロンによる効果」に関して5段階尺度で質問したのではなく、いくつかの項目を示したうえで、「効果があったと思うもの」を複数選んでもらう形式がとられている。既述の山口県と諫早市での調査結果に加えて、これらの地域間も比較を行うために、高崎市と鹿児島県でのデータを、「回答者全体のうちその項目を選んだ者の割合」に変換することで、4地域の比較を試みた。

a) 人と話す機会の効果

サロン利用によって「人と話す機会増加」の効果があると思った担い手は、山口県で71%、高崎市で93%、諫早市では82%いた。なお、鹿児島県での調査にはこの項目がなかった。これらの結果を図11に示す。

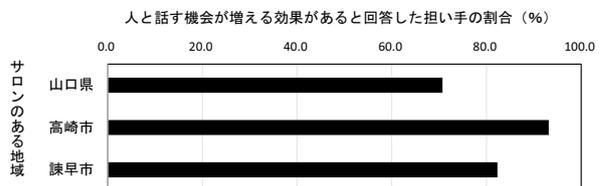


図11 4地域のサロンによる効果の比較 (人と話す機会増加) 注2

b) 閉じこもり・孤独死防止の効果

サロン利用によって利用者に「閉じこもり・孤独死防止の効果がある」と答えた担い手は、山口県で67%、高崎市で71%、鹿児島県で55%、諫早市では72%であった。これらの結果を図12に示す。

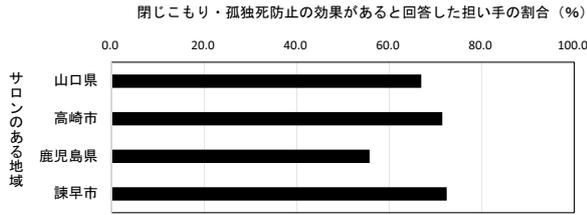


図12 4地域のサロンによる効果の比較 (閉じこもり・孤独死防止) 注3

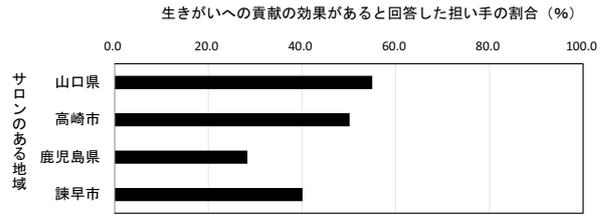


図15 4地域のサロンによる効果の比較 (生きがいへの貢献) 注3

c) 新しい友人との出会いの効果

サロン利用によって利用者が「新しい友人と出会う効果があった」と答えた担い手は、山口県で56%、鹿児島県で40%、諫早市では54%であった。なお、高崎市での調査にはこの項目はない。これらの結果を図13に示す。

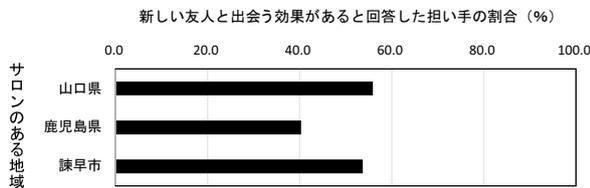


図13 4地域のサロンによる効果の比較 (新しい友人との出会い) 注3

f) 心配事・悩み相談の効果

サロン利用によって利用者の「心配事や悩み相談の効果がある」と答えた担い手は、山口県で33%、高崎市で39%、諫早市では40%であった。なお、鹿児島県での調査にはこの項目はない。これらの結果を図16に示す。

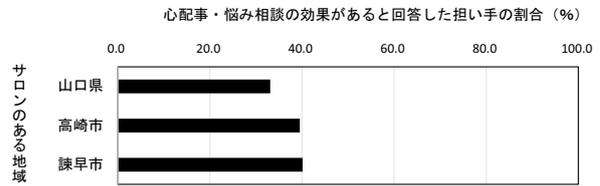


図16 4地域のサロンによる効果の比較 (心配事・悩み相談) 注3

d) 安否確認の効果

サロン利用によって利用者の「安否の確認効果があった」と答えた担い手は、山口県で58%、高崎市では65%で、鹿児島県では42%、諫早市では81%もいた。これらの結果を図14に示す。



図14 4地域のサロンによる効果の比較 (安否確認) 注3

e) 生きがいへの貢献効果

サロン利用によって利用者の「生きがいへの貢献の効果があった」と答えた担い手は、山口県で55%、高崎市で50%、鹿児島県で28%、諫早市では42%であった。これらの結果を図15に示す。

4. 考察

「人とのつながり」というフレーズは、福祉や公衆衛生、医療・看護に加えて、特に近年は被災からの「復旧」や「復興」にも関係づけて用いられている表現である。この他者との社会的なつながりはソーシャルネットワーク (social network) と呼ばれている。野口 (1991) はそれを「対人関係の構造的な側面に着目したもの」と操作的に定義した。

一方で高齢者は人と「つながる」だけでは幸福でいられるとはいえないだろう。それは、我々はだれしもが他者からの「支え」や「助け」を受けているためである。この「支え」や「助け」はソーシャルサポートと呼ばれており、これまでも多くの先行研究において定義がされてきた。野口 (1991) は「対人関係の機能的な側面に着目したもの」とし、林 (2010) は「社会関係において他者との間で取り交わされるもろもろの支援・援助」とした。

本論で着目した、①人と話す機会の増加、②閉じこもり・孤立の防止、③新しい友達の形成、④安否の確認、⑤心配事・悩みの発見、⑥いきがいへの貢献、の6つの項目についてソーシャルネットワークとソーシャルサポートのそれぞれの視点

から考察してみたい。

まずソーシャルネットワークにあたるのは①から④といえよう。なかでも「人と話す機会の増加」は、山口県、高崎市、諫早市のいずれでも多くの担い手が「効果あり」と捉えていた。サロンの特徴の1つに、「地域ごとに設置されている」という点がある。つまり、介護保険の通所介護事業所などは高齢者が住んでいる各所から利用者が集まっているのに対して、サロンは同じ自治会の高齢者だけが利用をしている。そのため、通所介護事業所の利用者同士よりも、普段から会う機会が多いはずである。そのため、サロンが開催されていない日であっても利用者同士は「散歩」や「買い物」、「ゴミ出し」などのあらゆる生活場面で会う機会がある。その時に、それまでは簡単な世間話で終わっていた近隣の高齢者同士でも、「サロン」という共通の話題があれば話しがはずむことが十分に期待できる。サロンの開催頻度が仮に月に一日に過ぎなくても、そのように日常的に近隣の高齢者同士が会って話すようになれば、「閉じこもり・孤立の防止」や「安否確認」の効果につながると容易に想像できる。さらに、それまではあまり会って話す機会がなかった高齢者同士でも、サロンでともに歌ったりゲームをすることで懇意になることで「新しい友達が形成する効果」も期待ができるかもしれない。

次に、それらの点をソーシャルサポートの面からみる。①から③および⑤と⑥が情緒的サポートにあたり、④の安否確認だけが道具的サポートにあたる。図11から図16を概観すると、「①人と話す機会の増加」と「②閉じこもり・孤立の防止」は、4つのどの地域でも担い手は「効果あり」ととらえており、「③新しい友達の形成」は効果があると答えた担い手の割合が比較的低めであった。

表2 6つの調査項目と社会関係との関連づけ

	ソーシャルネットワーク	ソーシャルサポート	
		道具的	情緒的
①人と話す機会の増加	●		●
②閉じこもり・孤立の防止	●		●
③新しい友達の形成	●		●
④安否の確認	●	●	
⑤心配事・悩みの発見			●
⑥いきがいへの貢献			●

「④安否確認」は4つの地域で大きな相違がみられた。なかでも諫早市と鹿児島県の結果は2倍近い開きが見られた。諫早市で「安否確認の効果がある」と多くの担い手が考えたのは、同市では市の面積に対して密にサロンが運営されており、サロンを利用している高齢者同士の居住地も比較的近いことから、日常的な安否確認につながっているのではないかと考えられる。

このような点から、高齢者を支えている保健師やケアマネジャー、ソーシャルワーカー、医師、看護師といった専門職はもちろん、普段からサロンを運営している地域住民らも、「サロンはネットワーク強化の効果が期待できる」ということを共通理解しておく必要がある。このことを住民や専門職らが常に意識しておけば、リハビリや通所介護事業所のように、高齢者の運動機能を回復させるといったことをサロンで模索する必要性がなくなり、地域の高齢者にできるだけ長くサロンを利用してもらうことこそが肝要だという考えにつながり、自然体でサロンが運営されていくのではないかと考えられる。

注釈

注1 山口県社会福祉協議会（2006）『「人と人との豊かなつながり」を育む「ふれあい・いきいきサロン」のデータ及び日本社会福祉学会第65回秋季大会 配布資料 岩永耕「担い手が考えるふれあい・いきいきサロンの効果や課題—サロン担い手への質問紙調査による分析から—」のデータを筆者が加工した。

注2 注1の文献及び高崎市社会福祉協議会（2015）「ふれあい・いきいきサロンアンケート報告書」のデータを筆者が加工した。

注3 注2の文献及び鹿児島県社会福祉協議会（2011）「ふれあい・いきいきサロン活動実態調査報告書及び活性化プログラム」のデータを筆者が加工した。

参考文献

- ・総務省統計局「人口推計—2019年（令和元年）10月報—」（<https://www.stat.go.jp/data/jinsu/i/pdf/201910.pdf>, 2019.10.20）
- ・国立社会保障・人口問題研究所（2013）「日本の世帯数の将来推計（全国推計—2010（平成22）年～2035（平成47）年—）」（http://www.ipss.go.jp/ppajsetai/j/HPRJ2013/hhprj2013_honbun.pdf, 2013.8.19）

- ・全国社会福祉協議会（2000）『あなたもまちもいきいき！「ふれあい・いきいきサロン」のすすめ～寝たきり・痴呆予防にも～』
- ・全国社会福祉協議会・地域福祉委員会・全国ボランティア市民活動振興センター（2016）『社会福祉協議会 活動実態調査等報告書 ボランティア活動年報2015』
- ・森常人（2008）「高齢者を対象とした地域社会での人間関係の構築と生きがいの形成のため」『政策科学』16(1),87-101.
- ・森常人（2014）『「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察』『関西外国語大学研究論集』100,257-270.
- ・豊田保（2016）「参加者の視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義」『新潟医療福祉学会誌』8(2),16-20.
- ・山村靖彦(2013)『「ふれあい・いきいきサロン」の支援の指標に関する研究』『別府大学短期大学部紀要』32,27-41.
- ・松井順子（2014）「ふれあい・いきいきサロンの有効性と課題に関する考察」『大阪千代田短期大学紀要』43,82-93.
- ・高野和良ら（2007）「高齢者の社会参加と住民組織～ふれあい・いきいきサロン活動に注目して～」『山口県立大学大学院論集』8,129-137.
- ・黒岩亮子（2014）『「ふれあい・いきいきサロン」の変容と課題』『社会福祉』45,89-99.
- ・山口県社会福祉協議会（2006）『「人と人との豊かなつながり」を育む「ふれあい・いきいきサロン」』
- ・鹿児島県社会福祉協議会（2011）「ふれあい・いきいきサロン活動実態調査報告書及び活性化プログラム」
- ・高崎市社会福祉協議会（2015）「ふれあい・いきいきサロンアンケート報告書」
- ・日本社会福祉学会第65回秋季大会 配布資料 岩永耕「担い手が考えるふれあい・いきいきサロンの効果や課題－サロン担い手への質問紙調査による分析から－」
- ・野口裕二（1991）「高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定」『社会老年学』34,37-48.
- ・林孝之（2010）「一人暮らし高齢者のソーシャルサポートの研究動向」『北星学園大学大学院論集』1(3),141-152.

